

編集後記：4月12日、南極観測船「しらせ」が南極昭和基地への航海を終え、東京晴海ふ頭に帰港しました。「しらせ」は3代目の南極観測船として1982年に就航し、先代の「ふじ」からバトンを受けました。以来、日本の南極地域観測の支援として、観測隊員と物資の輸送や海洋観測のための昭和基地への航海を25回行い、今年その役目を終え退役となります。

次代の南極観測船はその数日後4月16日に舞鶴にて進水し、「しらせ」と命名されました。先の現「しらせ」の帰港を待っていたかのように、新「しらせ」は進水したばかりで竣工したわけではなく、就航するのは2009年、つまり新旧両「しらせ」の間では直接バトンは受けわたされません。

昭和基地での観測といえば、オゾンホールによる上空のオゾン全量の異常な減少を1982年に初めて観測したのが日本の観測隊であることは、比較的知られた話です。一方で、昭和基地で観測し続けられたオゾンゾンデによる、オゾン鉛直分布の時系列データセットが、Solomonらがオゾンホール発生のメカニズムを考察するうえで大いに助けになったという話にいたっては、どのくらい知られているでしょう。これらの観

測は異常な事象を見るために始まったものではありませんが、観測が平常時から途絶えることなく続けられたことによってこのような重要な知見が得られた、ということは改めていうまでもないことです。ところが、その継続された観測の価値が広く認識されているかといえましょうか？

さて、先日帰港した3代目南極観測船「しらせ」が退役し、次代「しらせ」がまだ就航しない空白の2008/2009年シーズンは、オーストラリアの観測船「オーロラ・オーストラリス」をチャーターし、観測隊員の交代と基地を維持し越冬するのに必要な物資の輸送が例年より小さい規模ながら行われ、定常的な観測は継続されるとのことです。「しらせ」に先立って帰国した第48次南極観測隊越冬隊は、ここ数年頭打ちの傾向になっていた温室効果ガスのメタン濃度が昭和基地において昨2007年は転じて上昇したことを速報しました。しかし、そういった観測事実に接するまでもなく、地味ながら今後も空白なく続けられる観測に後世きつと光が当てられる、いや当てねばならないと確信するところです。

(藤田 建)